



参加者の声

上智大学アルペ国際学生寮 阪田 英理奈
国際教養学部（2019 年度入学）

1 貧困をなくそう



以下は本プログラムに参加した寮生である阪田さんの体験談です。阪田さんは、PBL（課題探求型）のパートでチームA（Team A—SDGs Goal 1 “貧困をなくそう”）のメンバーとして活動しました。阪田さんに、PBLのテーマを選んだ理由やプログラムに参加した感想とプログラムから学び得たことについて、うかがいました。



PBLのテーマを選んだ際、「貧困」という言葉の意味について改めてチームのメンバーと考えました。その時に新型コロナウイルスの影響を受け日本で貧困に苦しむ方々の存在のことが頭に浮かび、彼らの「貧困」と、発展途上国で必要最低限の生活ができない方々の「貧困」との違いは何なのかを考え、その結果、その2つの貧困は異なる要因から派生したものなのだとわかりました。新型コロナウイルスの影響に限らず日本では多くの人々が貧困に苦しんでいるという事実を初めてこのPBL Programに関するリサーチで学び、同時に、その事実やそれらの人々を支援する団体の存在が周知されていないことを知りました。実際に行動を起こすにはモチベーションが必要ですが、まずはその事実を自分の知識として取り入れることが大切なのではとチームで話したところ、多くの人が見るSNSを通じて知識の共有をすることができればと考え、このプロジェクトを始動しました。

チームのメンバーとプロジェクトを始動した時、私たちの周りの人々がどのような情報を欲しているのか、またどのような情報を共有すればSDGsの達成に一步でも近づくことができるのかを考え、無我夢中でプロジェクトを進めました。しかし、全てオンライン上で行われていたということもあってか、あまりたくさんの反響を得ることはできず、私たちの投稿を見て実際に行動に移した人がいるのかまで把握できなかったため、自分たちの努力が空回りしているのでは、と心配になることが多々ありました。客観的にこの活動を見た時、果たして自分は是非協力したい、参加したいという気持ちに駆られるのか、という疑問を常に持っていました。

また、そもそもプロジェクト内容の決定の段階でも、誰かを巻き込みプロジェクトの規模を拡大することを目的としたこのプロジェクトにおいては、SNS上での情報発信だけではインパクトが足りなかったのでは、と個人的には悶々としていました。

もっとたくさんの人に知って欲しいという強い思いや情報があってからのSNSでの情報共有なのでは、と思い、フォロワーを増やす、という数字だけの目標ではなかなか具体的なプロセスの把握ができず手探りで活動を進める形となってしまう、反省点の多く残るプロジェクトになりました。

しかし、情報を共有してくださった数名の方からは貴重なお話を頂くことができ、このプログラム自体にも興味を持っていただいたということもあり、今後の活動にも良い影響があれば、と思っています。私自身も、協力者のうちの一人である学部の同級生がどのような思いを持ってそのサークルで活動をしているのか知る由もなかったため、この機会を用いて話ができて、とてもインスパイアされました。

同時に、一次情報の影響力を再認識しました。特に自分の知っている人から発信される情報は信憑性があるということに加え、新鮮で、自分が思ってもいないような経験を彼女なりの価値観で理解したということが親身に伝わるため、話に自然と引き込まれました。今後PBLの活動に限らずこのような機会があれば、自分が経験したこと、また感じたことを大切に、それらから課題解決に向けてどのような活動ができるのか、というプロセスでプロジェクトの決定ができればと思います。